

Risk Flash No.119

(Vol.4 No.9)

発行：滋賀大学経済学部附属リスク研究センター
 発行責任者：リスク研究センター長 久保英也
 〒522-8522 滋賀県彦根市馬場 1-1-1 TEL:0749-27-1404
 FAX:0749-27-1189 e-mail: risk@biwako.shiga-u.ac.jp

Web page: <http://www.econ.shiga-u.ac.jp/main.cgi?c=10/2>

- シリーズ「グローバル化と外国語教育」：第4回
 真鍋晶子 P.1
- 研究紹介：宇佐美英機 P.2
- リスク研究センター通信 P.3

グローバル化と外国語教育④

Magical Moment をもたらすために

社会システム学科教授 まなべあきこ 真鍋晶子

「グローバル化と外国語教育」…「グローバル化」を「球体として一つになる世界」と狭義に解釈し、「英語」教育に絞って私見を述べます。このような世界に出て行く経済学部学生が身につけるべき「英語」とは、コミュニケーションのツールとして、異なる母語と文化背景をもつ人々を結びつける働きをもつものだと思います。学生はこのことを十分認識しています。英語によるコミュニケーション力をつけたい、でも身につけられないとのジレンマに悩み、秘策を求めます。効果観面の業を伝授できればいいのですが、そんな神業はありません。残念ながら、語学力育成は如何に多くの時間その言語と接するかに依存するという昔ながらの基本は不変で普遍です。今はインターネット、You Tube で、何時でも何処でも英語の映画や音楽は楽しめ、何処のニュースも、同時に入手できます。手を伸ばしさえすれば…。材料は満ちあふれています。海外への旅行や留学も実現可能です。宝物を掴めばいいのですが、手を伸ばせない。大学時代は、アイデンティティを作る、極めて重要な時で、人生を方向付ける専門分野の勉強、趣味、クラブ、アルバイト、友だちや恋人との付き合い…忙しくて、英語学習に割ける時間は限られます。英語教師は、世に溢れる英語のなかでも、優れたものを抽出し、そういった英語に学生が接する時間を「強制」します。自律した人格の大学生に対して少々失礼ですが、課題を与え、「良い」英語に接する機会を強制的にも生み出すことがまず第一歩です。ただし、闇雲に英語に接する時間を増やすだけでは、言語理解はありえません。論文、雑誌や新聞の記事、講義や講演、プレゼンテーション、何であれひとまとまりの論理的な英文には英語特有の基本の「形」があり、基本形を知れば読解力が高まり、ポイントを聞き取りやすくなります。これを教示することが必要です。特に私はプレゼンテーションなど、ひとまとまりの英文によって自らの考えを「表現し、発信する力」が、彼(女)たちが社会に出た際に必要だと思っています。自己表現とはいえ、人に伝えるためにどうすべきかを必然的に考えることになり、人とのやり取りのためには相手の言うことを理解しなければなりませんから、コミュニケーション能力の育成にも繋がります。さらに重要なのが、母語でない言語が用いられている場の文化理解です。これなしでは、母語の論理が英語に当てはめられ、英語のようで英語ではない奇怪なものが使われ、意味が伝わらなくなります。映画、音楽、ニュース、雑誌、CM…。材料が何でも、自分が慣れ親しんでいるのとは違う文化に接するのは楽しいと思える場を提供すること、これも語学教育に大事です。そして、他者(の文化)を知れば、空気のように無意識に受け容れていた自ら(の文化)を考え直すこととなりますから、英語を学ぶことで自分を見つめることにもなるでしょう。さらに、もう一つ肝要なのは、英語のもつリズム・音楽を身につけることです。このためにも、英語の宝庫を繰り返し聞き、真似るという時と労力を使う努力が必要です。ただし、教師が、英語という言語特有の音の特徴・こつを伝授しなければなりません。英語が「読め」「聞こえ」「話せる」瞬間が必ず来ます。magic によるのではない、この magical moment の実現を信じて、学生と教師が地道な協同作業を楽しく続けましょう。楽しくなければ、身につけません。

研究紹介

伊藤忠兵衛家同族事業経営の研究(下)

企業経営学科教授 宇佐美英機 うさみひでき

伊藤忠兵衛家同族事業にかかる膨大な史料群は、まだ細目録を完成させていないため一般公開することはできない。このような状態は、今しばらく続くことになる。このままでは、近江商人研究のみならず、広く戦前期の商社史・貿易史研究に画期的な成果をもたらすことに疑いを容れない文書群を利用した学術研究は、停滞を余儀なくされてしまう。

史料を保管、整理、公開する施設をもつ大学の責務として、一刻もはやく文書整理を終えると同時に、学術研究の成果を公表する義務があることはいうまでもない。そのため、科学研究費などの外部資金を得て史料整理要員を雇用して目録作成を進めるとともに、せめて学内限りではあっても史料を利用した学術研究を行うことが求められるだろう。

幸いに、「総合商社前史の経営史研究－伊藤忠商事・丸紅商店研究の基礎的作業」(平成21年～23年)、「伊藤忠兵衛家同族による事業経営の研究－総合商社伊藤忠商事・丸紅成立前史の分析－」(平成24年～27年)に対して科学研究費助成を受けることができ、史料整理は着実に進めることができている。

前者の研究主題の成果の一つとして拙著『初代伊藤忠兵衛を追慕する－在りし日の父、丸紅、そして主人－』(清文堂出版、2012年)を上梓し、後者の主題では企業経営学科の6名の教員を分担研究者として共同研究を推進している。この研究では、戦前期に伊藤家が海外に開設していた支店が所在した地も調査し、関連資料を収集することも計画にしている。2012年度は、ニューヨーク・ボストン・サンフランシスコへ調査に出向き、関連資料の収集を行った。

共同研究は、伊藤本部・合名会社の「本部旬報」の精読を中心にして実施している。事業経営にかかる最も詳細な情報が記録されているこの資料は、これまでの研究では誰も用いておらず、通説の誤りを発見できたり、事業経営の推移を子細な点まで追うことができる。分担研究者である教員は、経営学関連分野を主に専門としている。しかし、第一次史資料は、着眼点次第でどのような研究分野にも応用できる。それゆえ、私のような歴史研究者とは異なる新鮮な観点で解釈することにより、それぞれの専門分野において新しい知見を得るものと確信しており、彦根学派が、いずれ構築されることを期待している。



リスク研究センター通信

山沖義和氏（厚生労働省評価審議官）セミナー報告

5月17日に厚生労働省の山沖義和審議官をお招きして、「社会保障と税の一体改革はなぜ必要なのか？－日本の財政状況と今後の課題－」と題して御講演いただきました。講演では、まず、日本の社会経済情勢の変化やいわゆる「アベノミクス」と称される政策内容について説明をしていただき、その上で社会保障と税の一体改革の意義や社会保障と税制抜本改革の内容の説明がありました。多くの学生は熱心に講演に聞き入るとともに、講演中の理解力を図る予想問題や講演後の質疑応答の時間にも積極的に参加する姿勢がみられました。セミナーの最後には司会の鈴木康晴准教授から、「社会保障改革と税制の抜本改革は世代間の配分に大きな影響を与え、特に将来の日本を担う若者たちにとっては負担を強いるものですから、本日聴講している学生諸君には自らの問題として考えるべき大きな課題だと思います。本日の講演をきっかけとして参加してくれた皆さん1人ひとりがこの問題に対してしっかり考えて自分の考えを持つきっかけとしてください。」とのまとめの言葉があり、セミナーは終了しました。

（ファイナンス学科准教授 すずき やすはる 鈴木康晴）

滋賀大学経済学部開学90周年、 リスク研究センター発足10周年記念シンポジウム開催報告

5月31日（金）に開催いたしました「滋賀大学経済学部開学90周年、リスク研究センター発足10周年記念シンポジウム」は梅雨の合間の爽やかな晴天に恵まれました。講堂が醸し出す歴史の重みに初めて滋賀大学を訪れた方々は感嘆の声をもらし、1階席、2階席を埋め尽くす参加者で会場は熱気に包まれました。



嘉田由紀子滋賀県知事をはじめ、願ってもないシンポジストの方々に参加いただき、アジアの国際政治の不安定性に民間としてどう立ち向かうかを報告、議論いただき、企業、地方自治体、大学などが連携して草の根活動を長期的かつ安定的に続けることがこの不安定性を安定化させるという点で議論の一致を見ました。それは、草の根活動ができる真の国際人を育てることが大学に求められることを意味し、大学人として身が引き締まる思いを同時に感じました。

開学100周年に向けての新しい一步を踏み出すすばらしい1日となりました。

（シンポジウムの様子は、嘉田滋賀県知事の**かた便り**でも取り上げられた他、中日新聞、京都新聞、滋賀彦根新聞等に掲載されました。）

（リスク研究センター長 くぼひでや 久保英也）

詳しくは<http://www.econ.shiga-u.ac.jp/main.cgi?c=10/2/5/10:5>をご覧ください。

「リスクフラッシュご利用上の注意事項」

本規約は、滋賀大学経済学部附属リスク研究センター（以下、リスク研究センター）が配信する週刊情報誌「リスクフラッシュ」を購読希望される方および購読登録を行った方に適用されるものとします。

【サービスの提供】

1. 本サービスのご利用は無料ですが、ご利用に際しての通信料等は登録者のご負担となります。
2. 登録、登録の変更、配信停止はご自身で行ってください。

【サービスの変更・中止・登録削除】

1. 本サービスは、リスク研究センターの都合により登録者への通知なしに内容の変更・中止、運用の変更や中止を行うことがあります。
2. 電子メールを配信した際、メールアドレスに誤りがある、メールボックスの容量一杯になっている、登録アドレスが認識できない等の状況にあった場合は、リスク研究センターの判断により、登録者への通知なしに登録を削除できるものとします。

【個人情報等】

1. 滋賀大学では、独立行政法人等の保有する個人情報の保護に関する法律（平成15年5月30日法律第59号）に基づき、「国立大学法人滋賀大学個人情報保護規則」を定め、滋賀大学が保有する個人情報の適正な取扱いを行うための措置を講じています。
2. 本サービスのアクセス情報などを統計的に処理して公表することがあります。

【免責事項】

1. 配信メールが回線上的の問題（メールの遅延、消失）等によりお手元に届かなかった場合の再送はいたしません。
2. 登録者が当該の週刊情報誌で得た情報に基づいて被ったいかなる損害については、一切の責任を登録者が負うものとします。
3. リスク研究センターは、登録者が本注意事項に違反した場合、あるいはその恐れがあると判断した場合、登録者へ事前に通告・催告することなく、ただちに登録者の本サービスの利用を終了させることができるものとします。

【著作権】

1. 本週刊情報誌の全文を転送される場合は、許可は不要です。一部を転載・配信、或いは修正・改変して blog 等への掲載を希望される方は、事前にご下記へお問い合わせください。

— *尚、最新の本注意事項はリスク研究センターのホームページに掲載いたしますので、随時ご確認願います。

(<http://www.econ.shiga-u.ac.jp/main.cgi?c=10/2/3:12>)

*当リスクフラッシュをご覧頂いて、関心のある論文等ございましたら、下記事務局までメールでお問い合わせください。

発行：滋賀大学経済学部附属リスク研究センター
編集委員：ロバート・アスピノール、大村啓喬、
金秉基、久保英也、柴田淳郎、
得田雅章、宮西賢次、山田和代

滋賀大学経済学部附属リスク研究センター事務局
(Office Hours:月一金 10:00-17:00)
〒522-8522 滋賀県彦根市馬場 1-1-1
TEL:0749-27-1404 FAX:0749-27-1189
e-mail: risk@biwako.shiga-u.ac.jp